日蓮大聖人御書全集

春の祝御書（はるいわいごしょ）

新版
1840
〜
1841

春の祝御書

文永12年('75) 1月 54歳 南条時光

春のいわいは、すでに事ふり候いぬ。

さては、故なんじょうどのは、ひさしきことには候わざりしかども、よろず事にふれてなつかしき心ありしかば、おろかならずおもいしに、よわい盛んなりしにはかなかりしこと、わかれかなしかりしかば、わざとかまくらよりうちくだかり、御はかをば見候いぬ。

それよりのちは、するがのびんにはとおもいしに、この

度下

たびくだしには人にしのびてこれへきたりしかば、

西山　にゅうどうどの　知　そうら　来　ひと　忍

にしやまの入道殿にもしられ候わざりし上は、力およば

うえ　ちから　及

ずとおりて候いしが、心にかかりて候。

通　そうら　こころ　掛　そうろう

その心をとげんがために、この御房は正月の内につか

こころ　遂　ごぼう　しょうがつ　うち　遣

わして、御はかにて自我偈一巻よませんとおもいて、まいら

おん　墓　じがげいっかん　読　思　参

せ候。「御とのの御かたみもなし」なんどなげきて候え

そうろう　おん　殿　おん　形　見　歎　そうら

ば、とのをとどめおかれけること、よろこび入って候。

殿　留　置　喜　い　そうろう

故殿は、木のもと、くさむらのかげ、かよう人もなし、仏法

ことの　き　下　叢　陰　通　ひと　ぶっぽう

をも聴聞せんず、いかにつれづれなるらん。おもいやり候

ちょうもん　徒　然　思　そうら

えば、なんだもとどまらず。とのの法華経の行者うちぐし（涙止殿ほけきょう ぎょうじゃ打具）て御はかにむかわせ給うには、いかにうれしかるらん、いかにうれしかるらん。（墓向おん たも嬉）